

平成 24 年度益田市図工美術部会・みるみるの会研修会

感想レポート

みるみるの会 会員

金谷 直美

はじめに

みるみるの会では、小中学校の図工・美術教育の指導力向上のために「対話による鑑賞」を月に 1 回研修している。今秋、益田市で島根県造形教育研究大会が開催されることもあり、その事前研修を兼ねて、島根県立石見美術館にてこの研修会が開催された。本文は、2012 年 7 月 31 日と 8 月 1 日に、京都造形芸術大学より伊達隆洋氏を講師に迎え行われた研修会の感想レポートである。

プログラム内容

7 月 31 日 AM	講義 「対話による鑑賞」とは？ 研修 1 「対話による鑑賞」の授業体験
PM	研修 2 「対話による鑑賞」の実践，ファシリテーションの振り返り グループディスカッション 企画展「巨匠たちの英国水彩画展」鑑賞 アートカード「じろじろみてね。」体験
8 月 1 日 AM	講義 作品選びとシークエンス作りについて 「対話による鑑賞」の実践

7 月 31 日

「対話による鑑賞」とは？

みるみるの会の春日から、「対話による鑑賞」についての講義があった。この日は、益田市内の中学校の教員を中心に約 40 人が参加していた。「『対話による鑑賞』に興味のある方」「『対話による鑑賞』をこれからやってみたい方」という問いに対して、たくさんの手が挙がり、この研修会の参加者の「対話による鑑賞」に対する興味や意欲の高さを感じることができた。

「対話による鑑賞」の教育的効果や新学習指導要領との関連についての話の後、今までの実践の中で定番となっている作品（ゴッホの靴など）をスライドで紹介した。作品を紹介しながら、鑑賞時の子どもたちの発言も紹介された。どんな作品を鑑賞させたらよいのか、という疑問があるなかで、実践の様子を垣間みることができたのは、良い機会だと思った。



研修1 「対話による鑑賞」の授業体験

40人を2グループに分け、展示室で2つの作品を鑑賞した。筆者が参加したグループは、まずウエストがくびれた黒い長そでのドレス（くびれがなければ、ハイジに出てくるロッテンマイヤーさんが着ているような服）をみた。キャプションに乗馬服とあったのだが、一見すると乗馬服には到底みえないものだった。「どうやって乗っていたのか」という話から、お互いに意見を交わしながら素材や形、機能性などについて話し合っていた。「では、次の作品に」とファシリテーターが言い場所移動を始めた後も、その乗馬服の周りに集まって話し合う参加者の姿が見られた。

2作品目は、橋本明治の「荘園」をみた。女性の目線や服装、ブランコのかかっている桐の木等、描かれているものから物語を紡ぎだしたりしながら話し合った。ここでは、1作品目では発言のなかった参加者からも発言があり、言わないで終わったことにちょっと後悔したり、自分の意見を言いたくなったりするなど、参加者の気持ちに変化が表れたように思えた。

「対話による鑑賞」の授業体験後に、質疑応答や感想を述べる時間が設けられた。その中で、「『こんなこと言ったら恥ずかしい』とってしまうのだが、どうしたらよいか」という質問があった。それに対して、ファシリテーターが意見を受容する態度を示し続けることや、みえているものを言わせ、みえているものはみんな一緒ではなく、一人ひとり違うことに気づかせることの大切さが述べられた。その際にも、必ず根拠を明らかにすること、作品にかえることが強調された。また、作者の意図や作品に関する情報をどう伝えるのかという質問も出された。それに対して、ファシリテーター側からは情報を積極的に伝えることはしないことや、「知識を得る＝作品がわかる」ことではなく、作品が伝えるメッセージを自分なりに解釈することが大切であることが伝えられた。筆者が思うに、今までの日本の鑑賞教育の歴史をみていくと、大半が知識偏重型で

あり鑑賞者は受け身の状態であった。「対話による鑑賞」では、鑑賞者の主体性が保障されている。子どもたちが主体的にみて、聴いて、話すことをとおして、美術作品をより深く楽しむことができるように、著者自身よりよいファシリテーションができるようになりたいと改めて思った。



研修2 「対話による鑑賞」の実践

午後の最初は、著者がファシリテーターとなり、草間弥生の「かぼちゃ」の作品鑑賞をした。事前準備をしたつもりだったが、それは本当に「つもり」だった。鑑賞者の意見を深められない、つなげない、自分が思っていたこの作品の面白さにつなげていけない。鑑賞者に言葉をかえしているけれども、曖昧すぎて伝わっていない。たぶん顔は笑顔だったと思うのだが、内心は焦りっぱなしの15分間であった。

鑑賞後のファシリテーションの振り返りで、指導助言者の伊達先生よりご指導いただいた。その中で話題を具体的にしていくこと、そのためには自分が納得できるまで何度でも参加者にきくことが大切とのことであった。著者自身、話題を深めようと「きいていたつもり」だった。でも、一つの意見に対し、1回ずつしかきいていない。鑑賞者の意見を「わかったつもり」になって、「そうですね。～ですね。では、他に意見はありませんか」と、言っていた。その後、じわじわと感ずることなのだが、著者のファシリテーションは、著者自身の人との付き合い方そのものだった。あと1歩踏み込めない、わかってないのに「わかったふりをする」、相手を大切にしているつもりが、実はそうでなかったりする。伊達先生も「かぼちゃ」は作品として、話を深めるのは難しいとおっしゃってはくださったが、鑑賞者からは面白い意見が挙がっていたので、もう少し踏み込んできくことができれば、より充実した鑑賞活動ができたと思われる。ファシリテーターをしながら、どこかで「わからない自分」をみられたくないという気持ちがあったのではないかと

と思う。鑑賞者とリッチな対話をすることができるよう、プア（poor）な自分を恐れずに、精進していこうと思った。まずは、日々の会話の中でもわからないことはきいて、確認していこうと思った。

グループディスカッション後の伊達先生の質疑応答の中で、一番心に残っているのが「多様性」と「多義性」の話である。恥ずかしながら著者はこれらのことを、わかっていなかった。対話による鑑賞の下準備をする際、「多様性」は意識していたが、「多義性」については曖昧であった。横の広がり、たてに深いイメージを持ちながら、今後作品をみていきたいと強く思った。

企画展「巨匠たちの英国水彩画展」鑑賞

学芸員の方の説明をききながら作品鑑賞をした。これまでの時間が、主体的に作品を読みとる活動だったので、作品について細やかに説明していただくのは何とも新鮮な感じがした。

アートカード「じろじろみてね。」体験

石見美術館が作成したアートカード「じろじろみてね。」を体験した。



8月1日

講義 作品選びとシークエンス作りについて

例示された「羊」たちによって、作品選びの原則を噛みしめると共に、多様性と多義性について実感することができた。また、同じ写真でも、その1枚だけみるのと、数枚の写真を見て羊に感情移入した後でみるのとでは、沸き起こる感情や思考に大きな差があることを、身をもって感じることができた。



「対話による鑑賞」の実践

フリーダ・カーロの「ふたりのフリーダ」を鑑賞した。1日目から話題にあがっていた、作品に関する情報については、鑑賞者が知っているようなタイミングをみて話してもらうのも話題を深めるのによいとのことだった。確かに、タイトルを伝えることで、もっとその作品について考えたい場合もあるので、その点も意識してファシリテートしたいと思った。

終わりに

この2日間の研修をとおして、「対話による鑑賞」は目の前にある作品を読み解いていくのだが、ファシリテートする自分も読み解かれていくように感じた。プアな自分がばれるのが恐くて、わかったふりをしていた自分もあっけなく、身ぐるみはがされてしまったような感じである。

美術教育に携わる者の一人として、「対話による鑑賞」に関する基礎的な部分をこの研修で学ぶことができた。それとともに、子どもたちの前に立つ一人の人として、その在り方についても考えるきっかけとなった2日間であった。美術教育に携わる者としても、人としても、今の自分がプアであることを認めつつこれからも精進していこうと思う。